教師の成長の基盤を構築する日本語教育実習デザインに関する実証的研究
―教師の専門性を捉える意思決定の観点から―

池田　広子

学位取得年月：平成18年9月
取得学位名：人文科学博士
学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】教師の専門性、行為中の内省、意思決定、デザイン、生涯学習

【要旨】

グローバル化時代に伴い日本語教員養成の質的向上を図ることは喫緊の課題であると指摘されている。教員養成の中で日本語教育実習はその要であるとされながらも、実習指導者の主観に基づくデザイン・指導、教科教育の模倣が多く実証的な改善がされてこなかった。本研究はこうした背景を踏まえ、実習の場を教師の生涯発達の観点から捉え直し、6年間にわたるプロトコルデータを基に授業中の実習生の学びを質的に特徴づけ、そこから実習デザインの指針やモデルを導き出すことを目指した。実習の改善、教師の質の向上を目的としたものである。具体的には、教師の専門性が最も表出するとされる「授業中の内省」（行為中の内省 Schön1983）に着目し、意思決定プロセスの枠組みで分析し、実習生の学びの特徴を明らかにした。また実習デザインのためには、教師教育者がデザインする際に操作可能な「外的要因」（状況要因）が意思決定にどう影響するのかを特徴づけることが重要であると考え、外的要因の中から教師の成長に関係する3つの観点（①授業形態：授業内容・目標②参加形態③プログラムにおける内省の取り入れ方）に着目した。この中で6タイプの実習を取り上げ、実習生の学びを追求した。

①授業形態(授業内容・目標)の観点においては、【研究 1】で(A) 日本語力伸長を目指す授業 (B) 多言語多文化共生意識創造を目指す授業を取りあげた。授業形態によってどのような実習生の学びが見られるかについて比較分析した結果、(A)実習では「言語面の調整」に対する学び、(B)実習では「社会文化面の調整」に対する学びが確認された。②参加形態の観点においては、【研究 2】で協働的に参加する実習について分析した。その結果、過去の話し合いによるアイデアの精緻化・明確化、アイデアの創造、活動の可能性を広げ補完し合う、自律的行為が観察され、瞬時に様々な学びを得ることが確認された。また【研究 3】では、分業的に参加する実習を取りあげて分析した。その結果、時間的な制約、活動の制約が意思決定プロセスに影響を与えることを示唆した。③実習プログラムにおける内省の取り入れ方の観点においては、【研究 4】で「内省モデルに基づく実習プログラム」を取りあげて分析した。その結果、実践からの内省を重視して批判的に振り返り、前提を捉え直し、パースペクティブの変化を示す学びや自律的決定を行っていることが確認された。これは、実践の内容面を改善する力量形成過程であることが示唆された。次に【研究 5】では、「教師トレーニング型プログラム」を取りあげて分析した。その結果、実践における表面的スキルに対する気づき、当初の計画とのズレに関する学び他律的決定が確認された。

さらに、全体の研究を融合し５つの研究から得られた知見に基づき、教師の成長の基盤構築を目指した実習デザインの指針とモデルを総合的かつ相互作用的な観点から導き出した。本研究で得られた知見は、教師教育関係者や実習指導者がデザインする際の一助となり、長年実証的に解決されてこなかった実習の改善や教師の質的向上に生かせるという点で意義があると言える。また実践中の学びを意思決定を通して立体的に解明した点は、第二言語教師教育の確立に向けて前進させたと言えよう。さらに意識変容学習理論の観点から実習生の成長を捉えた点は、生涯学習研究分野への突破口を切り拓いたと言える。

（いけた　ひろこ）